

コロナ禍の保育の創造 - 瓜生山とともに暮らす -

認可保育園 子ども芸術大学
園 長 鍋島 恵美

2020 年の春 出会う・慣れる季節

コロナ禍による緊急事態宣言発令は、瓜生山学園の全施設にとって予期せぬ事態をもたらせた。それはまた、私たちの保育活動にも多くの支障をもたらした。保育園においては、可能な限り家庭保育の協力要請が京都市より発出され、在宅勤務体制がとられる社会情勢の中で開園するものの、登園してくる児童の数は減少した。それは、新入園や進級するときと時が重なり、新たな環境に子どももおとなも共に信頼関係を結んでいく大事な時期においてである。まだ見ぬ子どもとの関係をいかに結ぶのか、離れていても家庭とは違う保育施設の今をどのように伝えていくのか、その一方で、保育園に登園してくる子どもと保護者の安心安全な保育の有り様をどのようにするのか、また、私たち保育者自身の安心安全をどのように確保するのか、という何重もの課題を抱えて模索しつつ、コロナ禍緊急事態宣言発令下の保育の挑戦が始まった。

ここでは、その具体的な取り組みについて振り返ってみたいと思う。緊急時であっても乳幼児が遊びに没頭する環境を乳幼児とともに創造するためには、どのような保育内容を計画し、実践をしていくのか、家庭保育の生活を送る子どもと保護者をどのように支援するのか、安心安全な新しい生活様式を取り入れた保育をどのようにしていくのか、瓜生山の四季とともに実践してきたことを語ってみようと思う。

(1) 緊急事態宣言発令下の保育

1) 緊急事態宣言下の保育必要児童数と職員体制

2020 年 4 月 20 日から 5 月 23 日まで緊急事態宣言が発令された。感染拡大防止のための登園自粛依頼通達を京都市より受けて、登園自粛をされるかどうか個々の保護者に尋ねた結果、在籍児童数の 70%の保護者から家庭保育に協力可能との回答を得た。そこで、感染拡大防止及び保育必要児童数の減少(30%)に伴い我々職員も 2 チーム体制(A, B チーム)を取り、在宅勤務と保育担当(出勤)とに分かれた。下記のように、両チームには、管理者がいること、乳児クラス、幼児クラスの保育者が必ずいることを配慮して編成し、一週間を月・火・水は A チームが出勤、水・木・金は B チームが在宅勤務という 3 日間に区切った体制をとった。そして、一週間の周期で、勤務と在宅勤務のチームを交代することにした。

A チーム: 事務課長, 主任, 1 歳児担任, 2 歳児担任, 3 歳児担任, 4 歳児担任各 1 名

B チーム: 事務職員(午後のみ), 園長, 1 歳児担任, 2 歳児担任, 5 歳児担任、フリー各 1 名

在宅勤務は自己研修とし、その内容は保育者の主体性を尊重することにした。それは、主

に教材研究や教材作成、保育関係図書の講読などに費やされた。園長の私は、在宅勤務者の健康状態把握と適切な勤務時間の管理のために、勤務開始、休憩、勤務終了時刻にメールを送信し一言「今日は気持ちのいい天気です」「元気ですか」など書き添えて、遠隔であってもコミュニケーションを取り合うことに努めた。

2) 園保育における適切な保育環境と保育計画について

① 異年齢合同保育の環境

家庭保育が可能な家庭を緊急事態宣言が出されたと同時に把握しつつ、園で保育を必要とする児童の年齢と人数が確定していった。その状況下で、1歳児から5歳児までの児童を適切な環境で保育を営む最善の方法について職員と知恵を出し合い協議をした。1歳児はすべてが新入園児であり、2、3歳児にも新入園児を迎えている。保育室は、安全安心を期して玄関にも給食室にも近く、事務所からも見渡せる乳児クラス(1, 2歳児)の2部屋を使用することにした。こうした乳児が安心して過ごせることを優先した。そして、乳児(1, 2歳児)と幼児(3, 4, 5歳児)とに分けて異年齢合同保育を試みた。送迎の保護者についても、感染拡大防止対策として玄関から事務室のカウンターまでと行動範囲の省スペース化を試みた。家庭からのその日の健康観察記録や必要事項を記入する用紙、その日の保育日誌や園からの配布物などをすべてこの事務所のカウンターに置いて対応することにした。この見渡せる事務所のカウンターは、日ごろから保護者・こども・保育者との対面が可能であり「つながる」ことを意識して設計したものであるが、今回も有効活用することとなった。非常に優れモノである。

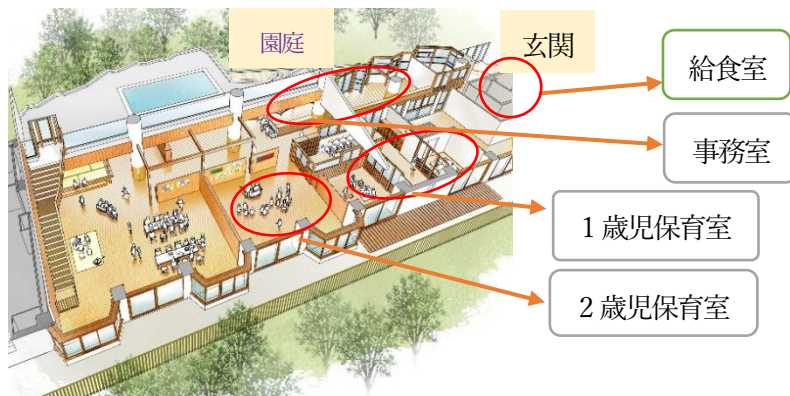


図1 園舎の俯瞰図 使用した保育室環境

② 異年齢合同の保育計画

保育計画は、乳児と幼児とに分けて活動及び事後記録を詳細に記入し、次のチームにつなぐことを重視した。4月1日に入園、進級して間もなくの緊急事態となり、子どもと心を繋ぎ始めようとしていた矢先、担任としては自分が大事にしていこうとする子どもとの関係を他の保育者にも知っていてほしいと、その願いから保育者間で密な連携が必要となった。

子どもや保護者との信頼関係づくりとともに、保育者間の思いをつなぐために大切にしてほしいこととして、保育計画はいつも以上に、①今日の姿から明日への保育につなぐこと、事後記録の観点としては、②異年齢混合の子ども姿と室内環境に留意することとした。

ここで、実際に記録された緊急事態宣言発令第1週の保育計画と事後記録の内容を振り返ってみたい。乳児、幼児とともに、瓜生山の春の自然に触れて遊び安心して過ごすことを願いに、異年齢が合同になることから、乳児クラスでは1歳児と2歳児の遊びの空間を工夫することや思わぬ事故が起らないように保育者の立ち位置に留意し計画されている。幼児クラス特に3歳児にとっては乳児クラスから幼児クラスへと移行した段階当初で、担任が留意して生活習慣を整えていこうとしていた矢先であり、その留意点を他の保育者と共有したい願いを綴っている。4歳児にとっては室内環境が違うことから戸惑いも多い点に配慮してほしいことが記されている。今回保育を必要とする5歳児においては、昨年度から土曜保育利用をしている子どもたちに限られたことから室内環境や異年齢保育についての不安がないことが事後記録に記されている。

次に、緊急事態宣言発令第4週の保育計画と事後記録から振り返ってみたい。乳児クラスでは、日によって登園してくる子どもの数が違うことに加え、1,2歳児の人数がアンバランスであることから室内環境の工夫や、久しぶりに登園するこどもへの配慮が記されている。山へは幼児クラスとともに出かける安心感があることや、季節の気づきや遊びの刺激が受けられる良さも記されている。幼児クラスでは、今だからこそ仲間と手をつなぐことと歌を歌い一緒に体を揺らすことの保育の大事さや、解除後の子どもたちの受け入れに家庭から安心して登園できるように、家庭保育に協力しているこどもたちにカードを作成して届けることを提案している。この提案は、すぐに取り上げ実行に移すことにした。今回初めての試みとなった異年齢合同保育の計画案作成と事後記録は、子どもたちの安心安全を守りつつ適切な保育を実践するために保育者自身がともに知恵を出し合い、柔軟にもの・こと・ひとに対応せざるを得ない状況のもと、子ども理解と保育者間の保育観を繋ぐとても有効な保育資料になった。

② 異年齢合同の保育内容と環境

大学内は誰も通学していないために、がらんとしている状況であることを活かし、社会的資源として大学内施設を最大に使用することとした。一方、いつもなら乳児クラスがよく利用している近隣の公園は、使用を自粛することにした。そして、園内の自然環境を最大限に活用した保育に取り組むこととした。ただ、1歳児にとっての山道はこの時期の発達から自力では登れないので、保育者がおんぶして出かけていくことになった。山の畑での幼児クラスの子どもたちの活動を乳児とともにほっこりと見つめて過ごす時が流れていた。ここで、保育の営みの流れをカレンダーを通して追ってみたい。4月第3週にはクラス懇談会を当初は予定していたが、この事態となり延期することにした。その代わりに、5月のお便りにその時に保護者と話し合いたかったことを資料にて届けた。5月第3週と第4週には、「消火避難訓練」「幼児クラス園外保育」の行事が予定されており、災害はいつ何時やってくるかわからないので、消火避難訓練は計画通り実施することにした。さらに、幼児クラスの園外保育についても、その日の幼児クラス担当の保育者の「こんな時だからこそ、こど

もと一緒に私が学生時代に感じた不思議な空気感を、子どもたちにも味わってほしい」との熱い願いに添い実施することにした。当日の幼児の保育必要児童は、3歳児1名、4歳児2名、5歳児2名であつた。その子どもたちを「楽心荘¹」へ旅するようにいざなった保育が実践された。いつもの山道を探索しつつ1年前に遊んだ痕跡を見つけてはもう一度そこに寄り道をして遊んだり、お宝と称して気に入った自然物を集めたりして、いつも見ているが中に入ったことのない「楽心荘」の扉を開けた。先生が味わった「不思議な空気感」を子どもたちにも伝えたいという思いの真摯な美しい表現の時が流れた。子どもたちもその表現に魅せられるかのように、もう一つの世界へと入っていった。最後にお宝を思いのまま並べた造形とともに、人がそれを囲んで描いた「曼荼羅」の表現は壮観だった。そして、子どものもう一つの楽しみは、園外保育の日には、家庭から持ってくる弁当を食べることである。「いただきます」と、現実に戻って楽しい昼ご飯となった。

(2) 緊急事態宣言解除を前に

子どもに使って遊んでほしい指人形やままごとで使用する机や、大きな鳥のモビールなど、こどもを思い描いての先生たちの在宅勤務だったことがうかがえる。

一方で、こんな時だからこそみんなで一緒に体を揺らし、声を出して歌を歌うことを楽しみたいとの願いから、ギターの練習に取り組んだ先生もいた。この先生には、4歳児のこどもがおり家庭保育に協力し仕事をするそばには子どもがいる環境だった。その当時「子どもは、遊んでくれないと怒りをぶつけ、私もイライラとし決していい関係ではなかった。きっと、在宅勤務で家庭保育をされている保護者や子どもも同じ思いをしているのではないかと思う」と、語っている。その後、同僚のアドバイスもあり、我が子とともに在宅勤務の中ではギターの練習に励みつつ、園内でもこどもと歌を歌うときにはギターを奏でる保育の挑戦が始まった。

園長の私も、昨年度から畑と共有の敷地内の砂場に影がないことから、どこに砂場を作るか頭を悩めていた。しかし、施設課の方の一言から、山の畑のそばの一角にある木陰に砂場を作ろうと“園長秘密プロジェクト”を企てた。緊急事態宣言下、大学内は静かであり、保育を必要とするこどもの人数は限られている。先生たちの頑張りをそばで観つつ、何かしてみたくなった。今、ここにいる先生と子どもたちと一緒に基礎工事に取り掛かった。まずは、山に置いてある伐採されたほど良い長さ太さの木を子どもと一緒に見定めて運び、土止めを作り、そこに以前から山にある使用してもよいとされる山砂を運んだ。この日から、ぼちぼちと砂を入れては遊び、遊んではまた砂を足し入れてと繰り返しつつ楽しんでいる。

(3) 家庭との連携及び子育て支援について

働く保護者にとっても新たなことに立ち向かう中で、保育を必要とする家庭とは今まで通り情報交換が可能であったが、家庭保育に協力している70%程度の家庭にはどのように情報発信して連携を取るか思案することになった。在宅勤務の下で子どもがそばにいることは、大変であろうと察することができた。

¹ 京都芸術大学内の校舎のひとつ。1988年4月設立。「詩経」の「豊楽」、禅語の「道心」からとる。能舞台。

1) 家庭保育協力 70%の保護者に注目した場合

保護者の仕事環境は、自宅勤務でリモート、営業自粛、自宅待機、パート時間短縮などと、多種多様であった。その中で、こどもが家庭にいて、テレワークやリモートでの仕事の母親は、仕事と家事育児にイライラされることも多く、「当時を思い出したくない」「爆発しそうだった」と当時を振り返っておられる。一方、自宅待機となった母親の一人は、子どもと遊ぶ時間を意識的に作り、保育園と同じリズムを保つことに努力されていた。

保育園の送迎は夫婦で協力されている姿があるが、家庭保育における育児は母親にかかっていることがうかがえる。ある日、「先生、このままだと子どもに手を上げそうです。一日だけ預かってもらえませんか」と、SOS の電話が入った。もちろん「いいですよ。リフレッシュしてください」と、子どもを受け入れた。その帰り、「先生 ありがとうございます。明日から何とかできそうです」と話して帰られた。私たちは、保護者の育児のストレス緩和やこどもの気持ちを保育園とつなげたい願いを込めて、月間のおたより、子どもへのメッセージカード、個人購読の月間絵本を郵送したり、HP 上の日々の様子の写真を通して瓜生山の季節感が届くように配信したりすることにした。

2) 保育を必要とする 30%の保護者に注目した場合

保護者の仕事環境は、自営業、教師、公務員などであり、保護者自身が、コロナに自分が感染しない、うつさない努力をして出勤されることを願った。保育はいつも通り実施してはいるが、職員体制や保育環境は縮小されていることを理解していただくことや、感染拡大防止について、家庭と園が協力していくことがいつも以上に必要となった。保護者が、元気に仕事に出かけられるように支えることが、私たちの最善の子育て支援と考え保育を提供した。

2020 年 5 月 25 日緊急事態宣言解除となった日、こども達がみんな揃って登園してきた。先生たちも全員が出勤となった。その朝に、こども達からは「みんなと一緒に遊べるなあ」と元気な笑顔がはじけ、先生からも「みんなと一緒に仕事できるのがやっぱりうれしい」という言葉が聞かれた。「みんなと」という今までそのことが日常だった保育園の環境が、緊急事態宣言発令となった瞬間からシーンと静まり、限られたひと・もの・ことのなかでの暮らしとなった。解除の日には、「みんなと」が特別の響きをもつ言葉となり、輝くときが流れた。

おわりに

瓜生山の自然は、こんな時も変わることなくいつもと同じ様相で、私たちを包み込んでくれている。こんな時だからこそ瓜生山の自然の中でいっぱい遊んだ。春の恵みのタケノコを掘って食べたり、土と水で遊んだり、砂場をつくったり遊んだり、小さな生き物や草を発見したり、こどももおとなも夢中になって遊んだ。今も、心地よい風が瓜生山から流れている。

コロナ禍が収束した後は、「社会構造や人間の意識も大きく質的に変化するように思う。保育の在り方も呼応して変化してくるであろうし、変化せざるを得ないように思う(岩田との私信)²」。私たちは、今その大きな時代の変化に立ち会っている。

瓜生山とともに暮らすこの地に「こどもこそ未来」と掲げ、こどもとおとなの学び舎が 2005 年創立されたことに畏敬の念を抱く。そして、ここで暮らす意味を継承しつつ新たな認可保育園こども芸術大学の創造に「みんなと」挑戦していきたいと願う。

本実践報告は、第 74 回日本保育学会自主シンポジウムにおいて話題提供した内容を執筆したものです。初めて遭遇したコロナ禍で私たちが知恵を絞り保育を絶やすことなく提供してきた記録です。春ののち季節は夏、秋、冬とめぐり夏のプール遊び、秋の親子運動の日、冬の子ども発表の日と遊びや行事について、感染拡大防止対策を考えたいと実施する方向で進んできました。実施してきた取り組みについては、「2020 年度活動報告」にも記載しています。そちらも併せて観ていただければと思います。

² 京都教育大学名誉教授、恩師の書簡から引用